

## コロナウイルスと共に歩む

専敬寺衆徒 岩崎 歩

新型コロナウイルスというウイルスが聞かれるようになって、約一年がたとうとしています。この凶暴なウイルスは、多くの人の命を奪うだけでなく、仕事や日頃の日常生活に大きな影響を与え、人間関係までもくるわせてしまっています。まわりの多くの人から「コロナウイルスのせいで」とか「コロナウイルスさえなければ」というネガティブな言葉が聞かれます。

今回は皆さんに『仏典童話』の「ケシの実」の話を紹介し考えてみたいと思います。

サーバッティの町にキサーゴータミーという若い母親がいました。幼いひとり息子が急病であっけなく息をひきとってしまいました。家族が泣く泣く葬式の用意をはじめると、キサーゴータミーは息子を抱いていいました。「待って、この子を助ける薬を探してくるわ」家族がひきとめるひまもなく、キサーゴータミーは子どもを抱いてかけだしていききました。

町はずれの物知りのおばあさんの家に向けこみました。「子どもが死にかけています。良い薬を教えてください、お願いします。おばあさん」はげしく波うつ母親の胸にしっかりと抱かれた子どもを見て、おばあさんはいいました。「かわいそうに、この子はもう死んでいるよ。死んだ子が生き返る薬があったらどんなにいいか…。私も子どもを亡くしたから…」キサーゴータミーの耳には入りませんでした。少し遠くの評判の高い名医の家へ走りました。「先生、お願いです。子どもを助けてください」冷たくなつたわが子を暖めるように抱きしめる母親に医者はいいました。「奥さん、それだけはだれにもできないのです」「そんなことをおっしゃらず、お願いですからこの子を助けてください。お願いします…」泣きくずれるキサーゴータミーの肩をやさしくなでて、医者はなぐさめるようにいいました。「あなたの薬ならわかります。ジェータの林にいらっしゃるおしゃか様にお聞きなさい」

〈薬〉という一言をたのみに、キサーゴータミーは残る力をふりしぼってジェータの林へ向かいました。「わかりました、それではどこかでケシの種をもらつてきなさい。ただし一度も葬式をだしたことのない家からですよ」おしゃか様の言葉に、青ざめていたキサーゴータミーのほほは、少し赤みをとりもどしました。「坊や、もうすぐお薬をあげますからね」キサーゴータミーは息子にほほずりをすると、ふたたび町へ向かいました。大きな集落が見えてくると、キサーゴータミーの足はひとりでに速くなりました。「すみませんが、この子の薬にケシの種を少しだけませんか。」農家の主婦はこころよい返事をして、すぐ奥から持つてきました。「お宅はお葬式をだしたことがありますか」けげんな顔でキサーゴ-

タミーを見ながら主婦は答えました。「はい。去年、主人を亡くしましたし、前の年には両親が……。でも、いったいなぜ……」キサーゴータミーの話を聞いて主婦は目頭をおさえていました。「お気の毒に、ケシの種ならどこの家にもあるでしょう。でもお葬式を出したことはない家はねえ……。見つかるといいですね」キサーゴータミーは次の家を訪ねました。子どもが大勢いました。あとから出てきた母親が、自分の妹が死んで、その子どもたちをひきとったところだと言いました。その次の家の若い女性は、やっと生まれた赤ちゃんがお腹の中で死んでいたと話しました。次の家ではおじいさんが笑いながらいました。「わしは婆さんと二人暮らしだ。息子は二人あるがな。わしの親と婆さんの親、それに父親の両親と母親の両親、婆さんの方も同じこと、さあて、これで何人死んだかのう、ひい、ふう、みい……、それにわしらももうすぐだ。わっはっは」一人ひとりの話を聞くうちに、キサーゴータミーの胸の苦い熱いかたまりは次第にとけていきました。

「坊や、ごめんなさい。あなたのお薬は見つからなかったの、でもおしゃか様にお礼を申し上げにいきましょう。坊や、いちばん大切なことを教えてくれてありがとう……」キサーゴータミーのほほに涙は流れましたが、刺すような痛みは和らいでいました。

皆さんは、この「ケシの実」の話を聞いてどのように感じましたか。私は、このお話はコロナウイルスで苦しんでいる私たちへの問いかけをしているのではないかと感じます。

このお話と同じように、コロナウイルスを治す薬はまだありません。今現在、その治す薬のない状態で感染しないように工夫し、気遣いあうことしか私たちにはできません。コロナウイルスに感染しないように、常にマスクを着用し、感染のリスクを下げるためお互いの距離を取るなどです。でも、それでも感染をおさえることができないのはなぜでしょうか。それは、私たちが生きているからなのです。親鸞さんの言葉に「御同朋」ということばがあります。「同じ命をいただく仲間」という意味ですが、別の意味として「共に生きることができない存在であることを表した言葉です。生きるということとは、たくさんの人と接し、支え合うということ。それがなければ、人として生きられないということ。コロナウイルスに感染しないように心掛けていても、生きていく以上限界があるのです。だからこそ、コロナウイルスや感染するということをちゃんと見つめ、受け入れることが大切なのではないでしょうか。誰もが感染しうる立場にいて、ことを理解し、「共に同じいのちをいただいている仲間」として、差別するのではなく、共に支え合いたいですね。

おしゃか様がおられた、大昔から、四苦（生老病死）の悩みや苦しみは、この世の生きとし生ける衆生の課題でありました。コロナウイルスの蔓延が、皆が共に生老病死と向かい合うきっかけを与えてくださったのかもかもしれません。童話の中でキサーゴータミーが「坊や。いちばん大切なことを教えてくれてありがとう」と大事なことに気づかれたように、私たちもコロナウイルスのある社会を生きる中で、いのちの在り方を今一度見つけていきたいものです。